創立30周年記念事業について

創立30周年記念事業実行委員会

当センターは、昭和50（1975）年７月29日に、建設省（現国土交通省）砂防部所管初の財団法人として設立され、今年で満30年を迎えることから、創立30周年を記念しまして、記念誌の発行及び記念講演会の開催を行いました。その概要について紹介いたします。

記念誌『砂防技術――創立30周年記念出版』

平成７年に20周年記念誌を発行していることもあり、最近の10年間を中心に砂防関係調査及び研究の変遷についてとりまとめました。主要な目次は、次の通りです。

Ⅰ　砂防関係調査・研究の変遷
　１．砂防関係
　２．火山砂防関係
　３．地すべり・がけ崩れ対策関係
　４．総合土砂災害対策
　５．土砂災害発生地域の緊急防災対策
　６．自主研究
　７．国際協力
Ⅱ　将来への展望
　１．総括展望
　２．事業別調査・研究等の展望
Ⅲ　資料編

また、４月25日に創立30周年記念座談会を、特にこの10年間当センターにおいて尽力されました皆様をお迎えし、開催いたしました。ご出席いただきましたのは、矢野勝太郎氏（元理事長）、安江朝光氏（元専務理事）、瀬尾克美氏（元専務理事）、友松靖夫理事長、池谷浩専務理事で、司会進行を吉松弘行理事兼砂防技術研究所長が務めました。

皆様方には、この10年間の変遷について、組織・人材・技術という観点から幅広くお話しいただくとともに、これからの10年間に向けて当センターとしてのあり方や期待などについて、熱いエールをいただきました。

これら座談会の内容につきましては、創立30周年記念誌の冒頭に収録してありますので、ご一読いただければ幸いです。

記念講演会「創立30周年記念　砂防・地すべり技術センター講演会」

毎年６月に開催しております砂防・地すべり技術センター講演会を拡充して、創立30周年記念講演会として、平成17年６月29日に砂防会館別館シェーンバッハ・サボーにて開催いたしました。

記念講演会のプログラムは、以下の通りです。

なお、所属等は、すべて講演会開催当時のものです。

【開会挨拶】**友松靖夫**（財）砂防・地すべり技術センター理事長
【 祝 辞 】**近藤浩一氏**（国土交通省河川局砂防部長）
【記念講演】**石原良純氏**（俳優・気象予報士）
「気象予報士から見た地球温暖化について」
【記念講演】**山﨑 登氏**（NHK 解説委員）
「土砂災害と避難情報」
【記念講演】**番匠幸一郎氏**（防衛庁陸上幕僚監部監理部広報室長）
「イラクにおける自衛隊の活動について」
【閉会挨拶】**池谷 浩**（財）砂防・地すべり技術センター専務理事

国土交通省砂防部長の近藤浩一様からは、当センターが果たしてきた役割や今後の期待について、砂防行政に直接携わられる視点からのご祝辞をいただきました。その後、プログラムに従い３人の講演者の方々に記念講演をいただきました。

当日は、梅雨の晴れ間の蒸し暑い中、300名を超す多くの方々にお集まりいただき盛況な記念講演会となりました。ご参加いただきました皆様に改めてお礼申し上げます。

記念講演における各ご講演内容を次の通りとりまとめました。ご参考になれば幸いです。

開会の挨拶を行う友松理事長

近藤国土交通省砂防部長より祝辞

【記念講演】

気象予報士から見た地球温暖化について

石原良純氏　俳優・気象予報士

幼少の頃住んでいた横浜は、当時土砂崩れが多く、それが名物となっている感があったが、ある頃から急減し、砂防事業の進捗を実感している。その砂防と密接な関係にある気象について、幼少の頃から興味があった。ある番組をきっかけに気象予報士の資格取得を目指すことになり、まず購入した気象学の教科書を開くと最初に「太陽系のなかの地球」という項目が目に入った。まさに「神の目を持つ学問」であり、そのスケールの大きさに感銘を受けたのを記憶している。

気象予報に限らず、砂防も含めたあらゆる分野において専門家による研究成果や見解を一般市民にわかりやすく噛み砕いて伝えることが重要であると考えられるが、現実にはこの役割を担う人が少ないと思われる。私自身の気象予報士としての役割はまさにここにあると認識している。

このことを念頭に置き、私は気象予報と同時に空の楽しさを伝えるように意識している。その際、聴衆にただ「空を見てください」と話しているだけでは誰も見てくれないので、例えば4月なら「桜を見ましょう、そしてその上にある空を見ましょう」と呼びかけるようにしている。現在、気象情報に関しても多くの情報をわれわれはテレビ等から得ることが可能であるが、メディアから情報を得るだけでは不十分だと私は感じている。個人個人が天気を楽しみ、空を観察することが重要であると思う。

近年、日本では雨の降り方がまるで熱帯のようになってきているし、今年は6月における真夏日の日数が記録的に多く、地球温暖化の影響を私たちは次第に肌で感じるようになってきている。京都議定書からCO_2排出国第1位のアメリカ合衆国が抜けた今こそ、わが国は温室効果ガス削減目標に向かって他国をリードする立場となるべきである。そのためには国民一人ひとりが気象に関して関心を持ち、自ら空を観察することが望ましく、そのように呼びかけていくことが今後の自分の命題であると感じている。空を見ることは海を見るのと同じく大きな開放感を得ることができ、ストレス解消にもなると思う。

【記念講演】

土砂災害と避難情報

山﨑 登氏　NHK 解説委員

NHKに入局して以来、自然災害や防災の報道に携わってきた。取材等を通じて、「伝えられる教訓はあるか」「過去の教訓は生かされたか」を繰り返し問うてきた。情報を生かされるように伝えることは難しく、特に土砂災害は、危険性が目で見えないことから、洪水と比べても難しい。

平成16年の土砂災害は、例年の約4倍、過去20年で最多であった。この中で、三重県宮川村と愛媛県新居浜市の警戒避難の事例を検証し、避難情報のあり方を考えてみたい。

9月29日に起こった三重県宮川村の災害では、住民からの災害発生情報を受け、村では2地区に避難勧告を出していたが、村全体への避難勧告はすでに災害が生じ始めていた午前10時30分で、7名が犠牲となった。気象台や砂防部局の情報から周辺一帯の土砂災害危険性が高まっていることはわかっても、村では「起こるか、起こらないか」という情報に読

み替えねばならず、もっと早く避難勧告を出せただろうと考えるのは酷である。

愛媛県新居浜市立川地区では、同じく９月29日午後２時48分、連続雨量200mmを超えた時点で住民に避難準備を通達し、３時30分立川地区に避難勧告を出した。避難完了に約１時間かかったが、その後発生した土石流等で住宅５棟が全半壊したが、犠牲者はなかった。新居浜市では過去の災害後、避難勧告発令基準を決め、連絡体制を整備し、避難訓練も行っていた。

今後の避難対策を考える場合、高齢者など災害時要援護者の避難対策は特に重要となる。非常時にうまく機能させるためには、普段からの福祉と地域の連携を図ることや、新設された避難準備情報などを活用していくことが大切であると考えている。

また、情報提供者は情報精度向上を図るとともに、今の科学技術レベルで災害発生に関してどこまでわかるのか、限界があることをわかりやすく伝えるべきである。そして住民からは、避難勧告・指示発令のきっかけとなるような異常発生情報が自治体へ上がりやすくする。さらに情報を出す側が危険性を伝えたつもりでも、受け手はそう感じなかった事例もあり、双方認識の違いが生じないよう、普段から大切なことを伝えておく必要がある。非常時には情報を詳しく伝える時間はない。

情報と情報を結びつけ生かす努力を皆で続けていきたいと思う。人は災害に対して無力ではない。そして災害を防ごうとする志は、報道も防災担当者も違いはない。これからも一緒に考えていきたい。

【記念講演】

イラクにおける自衛隊の活動について

番匠幸一郎氏　防衛庁陸上幕僚監部監理部広報室長

平成16年１月から５ヶ月にわたり第１次イラク復興支援群長としてサマワで活動を行ってきた。サマワは人口15万人程、大半の住民がイラクの人口の約６割を占めるイスラム教シーア派の都市である。20年に及ぶサダム・フセイン政権下ではシーア派は迫害されており、サマワにも永い迫害と戦争の傷跡は残っていた。

イラクに向かう前、最初の支援隊ということで後に続く支援隊の礎を築くこと、そして必ず生きて帰ることの２点を決意した。

支援活動は衛生支援、給水、公共施設の設置の３点を中心として実施した。衛生支援は、主に病院のマネジメントに関する指導を行った。20年にわたる放置のため、病院内でも保育器の中にすらカビが発生し、患者の情報も充分に整理されていないなど、劣悪な衛生状態だった。病院内の清掃やカルテの整理から指導を行った。給水については、１日に４～５リットルの水の摂取が必要な気候風土で水の確保は重要事項である。サマワの水道普及率は約４割で、川や井戸からの供給があてにされているが、塩分や病原菌によりそのままでは使用に適さないものもある。当初は給水車による給水を行っていたが、浄水・取水装置の設置による安定的な水の供給の整備も行った。公共施設は、学校・道路だけではなく遺跡を防護する柵まで損傷が進んでいた。それら施設の復旧整備や、ユーフラテス川の増水対策について現地住民の雇用を創出することを考慮して行った。

復興の主役はあくまで現地のイラクの住民であり、アジアの仲間として協力するという意識が大事であると思う。これらの活動を行うに当たり、統率上の着意として、

・誠意、規律、団結、安全、健康の５点
・GNN（義理・人情・浪花節）
・ABCDE（当たり前のことをボーッとしないでちゃんとやる。出来るだけ笑顔で）

等を心がけた。

活動期間中、現地サマワの住民からは温かく歓迎された。また、日本という近代に急速に発展した歴史を持つ国ということで好感を持ってくれる人もいた。日本の歴史に誇りを感じるとともに、そんな歴史を作ってきた先人に対して恥ずかしくないよう自分達も立派に生きていかなければならないと感じた。